◆書　評◆

「池上四郎の都市計画―大阪市の経験を未来に―」

鈴　木　　伸（京都大学大学院）

はじめに

本書は大正期に第6代大阪市長をつとめた池上四郎（1857-1929）の都市計画および都市経営について，孫の池上淳が著したものである．当時全国で都市に人口流入していたが，大阪市も例外でなく拡大を続けていた．特に大正後期から昭和初期にかけては，大大阪時代と言われたように，大阪市が東京市（現東京都区部の一部）を差し置いて日本で最も人口が多く，最も繁栄していた時代である．その時代の礎を築いた市長こそ池上である．池上は学者や経済人を巻き込みながら数多くの社会事業を生み出し，様々な都市問題を解決してきた．本書は池上のその巧みな都市計画のルーツを探るとともに，その都市経営を著者の研究蓄積を踏まえながら評価している．

本書の構成と内容

本書は「はじめに」と序章を含む全8章構成となっている．

はじめに：大正期の新自由都市・大阪の経験から―
序章：学習創造都市の誕生
第1章：日本における都市計画構想の源流
第2章：大阪市における都市計画構想の原点
第3章：すべての市民を中流以上に
第4章：池上四郎の社会事業
第5章：地域コミュニティ協働事業論の創造的展開
第6章：日本における都市計画構想

まず「はじめに」において，大正期の大阪市が財政制約に苦しんでいたにも関わらず，商工業のみならず，文化・学習・創造活動も活発な都市であり，その背景に池上と関一のような学者や住友吉左衛門といった経済人と協力しながら，独自の都市社会政策を実施したことを論じている．

序章では池上市政において経済秩序の形成による産業振興政策と，社会事業による市民の分断を防止する社会システムの形成について議論を提起している．中でも池上が産・学と連携しながら，教育･文化といったソフト･インフラの整備を通じ中流階層の創出を進めていったことが強調している．

第1章では福原義春の文化資本論を参考にしつつ，池上や東京市長や台湾総督を務めた後藤新平などの人物の生い立ちと経験から，日本の都市計画の構想方法がどのように形成されていったのかを論じている．また都市形成，特に池上の思想の源流をなす二宮尊徳の仕法や武士道についても取り扱っている．

第2章では都市計画事業の確立，学区の負担均整，電力の公有化の3点の背景と評価を行っている．都市計画事業においては池上の警察官僚出身というキャリアと地域経営の経験が，腐敗した市政運営を正し，富裕層と貧困層の橋渡しをすることで，所得再分配や文化の共生が可能にしたことを指摘している．また当時では珍しい都市全体の計画的な経営や，土地増価税を財源とした公共施設の拡大による実質的な再分配を行ったことを評価している．さらに当時地域住民の寄付で賄われるのが一般的であった学校の設備運営を，池上は大阪市の財政自主権を活用し学区間の差を埋めたが，これはスタートラインの平等化を図った画期的な政策であったという．そし

て大阪電燈を市で買取り，市民による電力運営と財政収入確保に成功したが，総じて池上の政策が中間層の育成を目指し，人的能力に投資を行う政策は近年の創造都市論を先取りするものであったと結論付けている．

第3章ではW・ボウモルの都市文化政策論を援用しながら，池上がどのように中流階級の創出を目指したのかを論じている．ボウモルの「あらゆる階層が文化に享受できるようにするべきだ」という主張と同様に，池上のブレーンである戸田海市も経営者による科学技術・芸術文化を活かした製品作りが競争力と収益性の向上ならびに従業員の賃金上昇，購買力向上につながり，中流への道が開けると考えた．池上は民間の力と学者の意見を積極的に活用しながら，人材育成に励み大阪市の福祉環境を整備したのだ．それは彼らの理論にも通底するスタートラインの平等を実現しうる都市社会政策であったと論じている．そして，その成果もあり，大阪市には自由な雰囲気を求めて多くの著名文化人が集まり，独自の文化が花開いたことと，図書館などの知的インフラが充実していたことを指摘している．

第4章では池上の社会政策を総覧している．池上は市外から転入してきた低所得者層向けに文化的教養・職能能力涵養のための人的能力投資の政策を行っていたが，これは当時の国際的な市民サービスと比較して最先端であったことを指摘している．またこうした社会事業を大阪市は経済負担として見るのではなく，むしろ経済活動の一環として捉えていたという．工業研究所を市で設立し，イノベーション喚起を志向していた点は，創造都市の胎動だと評価する．こうした池上の都市構想は戸田の影響を受けているとも論じている．

第5章では西堀喜久夫の震災研究を通じた地域コミュニティ共同事業の業績を踏まえ，都市・地域経済にとって地域内の協同および相互学習の重要性を再確認している．西堀は阪神淡路大震災の復興過程の研究で，開かれた地域コミュニティと住民同士のつながりが復興の鍵であることを指摘した．これは文化経済学の観点からも地域固有の文化資本の重要性を示唆するとともに，大規模経営化が進む現代において見直すべき観点であると論じている．

第6章では創造都市論の議論を踏まえ，池上の都市構想が創造都市の先駆的事例であったことを指摘し，展望として著者の市民大学の取り組みを上げながら，都市・地域づくりにおける市民参加の重要性を主張する．またそのような市民参加を可能にした池上の人物像を親族の証言をもとに描き出して本書をまとめている．

本書の特徴と貢献

本書の貢献は，池上を分析することで，大大阪時代の成功要因が突き止められることにあるだろう．大阪市の都市経営に関して，主にスポットがあてられる人物は第7代市長の関である．関は池上市政時代からも助役として市政を担い，御堂筋の拡張や市営地下鉄御堂筋線の建設，大阪商科大学の開校といった今日の大阪市を象徴するものを作った．また大大阪時代の市長であったため，取り上げられるのだろう．しかし関を招き入れたのは池上であり，東京商科大学の教授職を蹴って助役になったほど，関は池上に共鳴したのである．つまり池上こそが大阪市の都市計画の根本なのである．その点でも大阪市の都市構想・経営を分析する上で，相応しい人物の研究と言えるだろう．

また本書の特徴は，著者の莫大な研究蓄積から池上市政を分析している点にある．その分析枠組みの豊富さは，著者の長年の研究の賜物だと言えるだろう．また既存の理論枠組みをそのまま用いるのではなく，著者なりに応用している点も巧緻である．例えば，文化資本論はブリュデューの概念ではなく，福原のものを応用して利用している．創造都市論に関しても，現代の都市ではなく過去の大阪市を用いているのは特徴的であろう．

本書へのコメント

本書に対し2つの論点を提示する．まず第1点目は池上市政に対する抵抗勢力に対する考察である．本書では池上市政に対しては基本的に肯定的に評されている．評者も池上の政策に対して異存はないが，当時池上に反対した勢力に関する叙述が不足しているのではないだろうか．現に大阪市が文楽協会への補助金打ち切りにするなど，教育・文化に対する投資は無駄な支出としてカットするような政治的決定が往々にしてなされることがある．成熟社会の現代でもそのような政治的判断がなされるぐらいなのだから，大正期ならなおさらであろう．関の政策に関しては様々な反発を生んだという．第1章でも池上以前の腐敗の指摘しており，「地域に食堂を公設で開き，無償で食事を提供するなどの姿勢は，市会で報告すれば笑いがあった.」と記されている．恐らくであるが，池上もこれほどの事業をなす上で様々な障壁があったであろう．その政治的な合意を得る過程にこそ池上の手腕とソフトなインフラ整備を推進していく大きなヒントがあるのではないだろうか．

また2点目の論点は池上市政の定量的な評価についてである．本書では池上の政策が中流階層を生み出す政策であったことが度々強調されていた．本書のP.107において，大阪市と全国平均の職業構成を比較して，商工・交通業，公務自由業の比率の高さ，無職業の流入傾向を以て，「中流の形成」の証左としている．しかし，この比較では大阪市が他の都市と比較して高かったことを結論づけるのは難しいだろう．なぜなら全国平均には農村部が含まれており，農村部は商工・交通業，公務自由業の比率が低く，無職業が流出する傾向にあるはずだからだ．そのため比較対象としては，東京やその他人口の多い都市ではないだろうか．池上の大阪市政が目指した中流層の創出を評価するのであれば，所得分布や格差指標などを分析するべきではないだろうか．

とはいえ，著者が本書で提示した都市・地域開発のキーパーソンのバックグラウンドを探る分析視角は，大阪市に限らず様々な都市に応用可能であり，今後の都市研究の一地平を開くものであったといっても過言ではないだろう．また著者が池上の分析によって得られた様々な示唆は，財政危機に瀕している現代日本の諸都市に良い処方箋を与えるのではないだろうか．

おわりに

最後に余談ではあるが，大阪人，広く言えば関西人は今でも大阪の街に対して強い誇りを持っている．特に東京に対する「負けへんで！」という気概は，多くの大阪人に共有されている．当然大阪出身の評者も例外ではない．第2都市が首都に対して対抗意識と強い誇りを持つことは，万国共通の現象かもしれない．それを差し引いても，この大阪人の気概を作り上げた影の役者は，本書を読む限り池上とって差支えないだろう．池上が築き上げた大阪の基礎は評者も含め，現代大阪人のDNAに刻みこまれている．その点においても本書は非常に興味深いものであり，大阪人がより深く大阪を知るための良書と言えるのではないだろうか．